

福島原発震災と反原発運動の四六年

—石丸小四郎さん（双葉地方原発反対同盟代表）に聞く

LABOR NOW脱原発ビデオ・プロジェクト

「LABOR NOW脱原発ビデオ・プロジェクト」は、ビデオ『フクシマ原発震災／被災者の声をたどる旅』の制作過程で、石丸小四郎さん（双葉地方原発反対同盟代表、六八歳）へインタビューをした（二〇一一年七月一日、いわき市小名浜市民会館）。本稿はインタビュー記録を同プロジェクトの文責で再構成したものである。なお、インタビュー映像の一部は、以下のサイトで視聴できる。

LABOR NOW脱原発ビデオ・プロジェクト
<http://nonkesfukushima.blogspot.com/>

1 三月二日二時四六分

三月二日に、私（石丸小四郎）は富岡町の自宅隣の事務所にしていたログハウスにいました。原子炉が六基ある福島第一原発とそこから一〇キロくらい離れた第二原発（四基）の間

より少し第二原発よりに住んでいました。原発にはさまれているわけです。富岡町の人口は一万六〇〇〇人。原発関係に従事している家庭が私の推計では四軒に一軒くらいあります。原発城下町です。

そこで、二時四六分を迎えました。これまでの地震ですと地鳴りが感じられたのですが、そういう前触れもなく、いきなりダダダダと激しい揺れが起きました。短周期振動です。部屋の薪ストーブが激しく動いていましたが、ヤカンは落ちませんでした。普通の地震であれば、ストーブの上のヤカンは落ちます。落ちないで激しくびびり振動が続きます。火を消そうと、ストーブのふたを取って、お湯を注ぎこみました。短周期振動地震だからできたと思えます。長周期振動ではできなかったと思います。その後、これでもか、これでもかと続きました。私は五、六分続いた感じがしましたが、実際は三分間でした。ログハウスは木を積み上げていますが、一枚ガラスが二枚入っていました。こ

のガラスが落ちるのではないかと心配しながらも、比較的冷静に見ていました。大丈夫だなと思つて、母屋のほうを見ましたら、母屋の瓦、一番上のグシが落ちていました。被害はそれくらいでした。

短周期振動の強い地震が三分も続いたので、原発が危ないというのがすぐ頭に浮かびました。前から少し原発について研究し、文献を読んでいたもので、原発は短周期地震に弱いと考えていました。私の自宅は海岸部から約二キロの標高七〇〜八〇メートルの高台ですから津波はまったく心配ないなと思っていました。

2 水素爆発と避難

一日の夜に子どもたちと孫を「リフレ富岡」（富岡町健康増進センター）に避難させました。コンクリートの建物なので、屋内待避としてはそこがベストだろうと思いました。私自身は自宅に残りました。窓という窓に目張りをしました。三月一日の二時に三キロ圏内の住民の避難、三キロ以上一〇キロ以内の住民の屋内待避の指示が出ました。私のところは三キロ以上ですが、一〇キロ以内なので屋内待避地域となりました。

一日の夜は停電になりましたが、ラジオで情報を取っていました。かなり克明に状況を知ることができました。ラジオを聞きながら記録をとろうと、メモをとっていました。原発については、やはり、ついにやったかというのが率

直な感じでした。いままでの知識からすると、相当危ないなと思いました。津波よりも、短周期振動で、相当機器類は破損しているなと思いました。一日の夜の段階では電源喪失の報道はなかったもので、知りませんでした。

翌一二日に富岡町の住民は川内村に避難することになりました。子どもたちと孫は、すぐ川内村に避難させました。私はもう少しここで避難の状況やどういふうにみなさんが動くのかを少し知りたくて、ギリギリまで見てみようと思いました。風向きについては意識していません。私はラジオを聞きながら残り続けました。

一二日午後三時三六分の第一原発一号機の水素爆発の音を聞きました。ドーンという音で、アーと思いました。煙か、雲か、爆発が目に見られるかと外を見ましたが、雲が低く垂れ込めていたので、確認することはできませんでした。

一八時頃に避難を始めました。避難指示が出てから一〇時間以上たっていました。その時はもう、町全体はゴーストタウンで、不気味という感じでした。陥没があったり、マンホールが高くなっている、スピードは出せません。それらを注意しながら、できるだけ原発を迂回しながら川内村の避難場所まで行きました。二五キロくらい離れています。

川内村に二日間いました。そこも自主避難区域に指定されたので、郡山市のビッグパレットに移りました。三月一六日に孫を連れて、秋田

の実家に行きました。

川内村で三号機の爆発の音を聞いています。またかという思いと、これはもしかしたら富岡に帰れないな、集中立地しているところで次々と爆発が起きて、最悪の状態に進んでいるなと実感しましたね。水蒸気爆発まで予想しなければならぬのではないかと、という感じがしました。

3 国・東京電力の対応と地元の人たち

三月一五日に、第一原発から北西方向へ放射能が流れて、浪江町の北西部の津島、飯館村、南相馬市、川俣町に濃密な放射能が降り注いでいったわけです。それが奥羽山脈に突き当たって、南に流れて、首都圏まで行く。

私は国を信じるという意識はまったくなくなっただけでも、国の対応はひどいと思います。当時は距離で避難区域を設定するだけで、どの地域に汚染が拡がっているかを考えていませんでした。国の避難計画では、放射能は同心円に拡がるということしか想定していません。それはチェルノブイリの教訓や、風の方向、気候条件、地形によって、汚染の拡がり異なることをまったく生かしていません。

自宅の近くにオフサイトセンター（緊急事態応急対策拠点施設）がありました。ここは副知事がヘリコプターで来て、周辺の自治体の防災担当者と原子力安全保安院と共に緊急対応をすることになっていました。しかし、電源が落ち

てしまい、全然機能しないので、逆に福島県庁へ逃げて行きました。国家的な犯罪に等しいと思います。

最初に、住民たちはリフレ富岡の駐車場に避難しました。一万六〇〇〇人の人口ですから、輸送するとしたら、大型バスが三〇〇台必要です。しかし、そんなバスがあるはずもない。自家用車に分乗しながら逃げる訳でしょう。そうしますと渋滞でにつきもさつきもいかないう状況になったそうです。夕闇せまるころに、何とか逃げて川内村にたどり着く状況でした。

メルトダウンして、水蒸気爆発という最悪のケースをたどれば、相当の人たちが犠牲になったと思います。これは後で聞いた話ですが、大熊町の役場の担当者が「避難するように国から指示された訳じゃない。警察官にこんなことしてられないぞと言われて、それで指示した」と言っていました。ほとんど、国や事業者（東京電力）は役に立たなかった。

三月一四日に、東京電力が第一原発から撤退すると内閣に言って、菅総理からとんでもない話だと言われた。東電はそういう会社です。私は学者でもなんでもないけれど、一労働者として四〇年間渡り合ってきた、この会社は、いつか何かやるぞと思ってきました。それが現実になった。そういう悔しさ、むなしさ、怒りがない交ぜになったのが初期のころの思いでした。避難所で東京電力労働組合の役員で町会議員やっている人に会ったので、「第二原発も危

ないのではないのか」と聞いたなら、「そんなことはない」と言っていました。しかし、彼ら自身だって全然わからないという状況だったのではないかと思えます。正確な情報がほとんどなかった。携帯はまったくつながりませんでしたから、外からの情報はラジオだけでした。

当時、地元の人たちは、現実の問題としてとらえられていないという感じでした。逃げろというから逃げた。放射能は目に見えない、臭いもしない、触ってもわからないだけに、恐怖感というものが湧いてこない。

原発集中立地地帯で、原発が安全だと思っている人はゼロに等しいです。みんな危険だと思っています。しかし危険だと思ふことと、事故が起きたときの恐怖というのは、重なり合わないのです。恐怖ではなくて、指示されたから逃げるという感覚だと思えます。外国の人たちはパニックにならない日本人はたいしたものだと言います。しかし、実際は、実感として受け止められず、ボーっとしている、恐怖を感じる前の段階だと思えます。もちろん、これは大変なことになったと感じています。しかし、当時は、ほとんどの人たちが二三日で帰れると思っていました。原発反対運動をしていた人も同じです。住民の意識はそんなものだった。それくらい知識と情報しかありませんでした。

二 反原発運動の四六年

1 岩本忠夫さんとの出会い

私は秋田県の高校を出て、今の横手市の小さな郵便局に入局しました。仙台での研修に参加しました。家内は富岡郵便局に勤めています。研修で一緒になりました。遠距離恋愛です。家内は一人娘でしたが、私は九人兄弟でしたので、富岡に来てくれと言われました。富岡の人間になったのは、一九六四年のオリンピックの年です。その当時は、原発予定地の土地買収はほとんど終わっていて、建設準備が進む段階です。大熊町の誘致決議は一九六〇年です。

しかし、当時の私は原発のことをほとんど知りませんでした。私は鉄腕アトムの世代です。当時は社会党も原子力の平和利用は是とする見解を持っていました。原発反対の声もほとんどありませんでした。原発とはどういうものか、危険性もよくわかりませんでした。

そうこうしているうちに、後に双葉町長になった岩本忠夫さんに会いました。岩本さんから「石丸君、核と人間は共存できないぞ」と言われました。そのことが非常に印象に残って、一九六五年頃から原発反対運動を手伝うようになりしました。当時の岩本さんは社会党の双葉地区委員長で、なかなか情熱的な人でした。彼は青年会運動をずっとやってきた人です。放射能

のこわさをよく知り、原爆の悲劇を二度と繰り返してはならないという思いがあったのだと思います。だから放射能のリスクをよく語っていました。

2 双葉地方原発反対同盟の結成

七一年に福島第一原発が稼働を始めます。原発を許してしまったことに対する反省と、危険を内包した原発でこれから起きるだろう様々な問題に対する取組み、これ以上原発を増設させないことを目的に、七二年に「双葉地方原発反対同盟」を結成しました。

結成前は社会党として反対運動をしてきました。全国的な方針はないですが、地区でそういう運動があるのならやっても良いよということでした。

ちょうどその頃、富岡町毛萱地区と楢葉町波倉地区に福島第二原発の建設が動き出したのです。どういう訳か町をまたいで、原発を作るという計画になりました。楢葉町には反対運動はありませんでしたが、富岡町毛萱地区の住民は「毛萱地区原発反対同盟」を結成して、吉田さんが中心になって反対運動をやりました。岩本さんは反対同盟の学習会を手伝っていました。私も同じ町ですから勉強会などを手伝っていました。

原発が作られたのがかなり早い時期ですから、市民運動として下地はゼロに等しかった。社会党、全日本農民組合連合会、日本社会主義青年

同盟(社青同)、双葉地方労働組合協議会など、労働運動と地域の活動家が一体のものとして運動する総評路線の延長線上に原発反対運動がありました。私は社青同としてかわりました。労働組合は当時の三公社五現業の組合が中心です。活発に活動していました。自治労は自分たちが原発推進の行政組織なので、ちよつと引いていました。ただゼロではなかつたです。

しかし、第二原発建設反対運動はばたばたとつぶされていきました。当時の木村守江知事は、いわき市出身で、人脈も相当ありましたので、深く静かに潜行して工作して行きました。そして、反対運動は一夜にしてドーンとひっくり返されて、劇的につぶされました。その後、私たちは反対署名運動をやりましたが、町全体が原発誘致で発展させるぞということでしたから、なかなか集まらなかつたです。

3 第一原発の運転開始と事故の多発

第一原発は、七一年三月二六日に営業運転を開始します。のっけから故障が続きました。よく岩本さんと抗議に行きました。七一年にスクラム(緊急停止)が一回ありました。九月に定検(定期点検)に入ると、燃料棒にピンホールが八本にあいていました。七四〇七五年頃から、原発内の汚染がひどくて、原発は危ないと聞こえてきましたね。最近になってわかってきましたが、東電は隠しに隠してきました。当時、東電はこんなにごいものかと驚いていたのでは

ないでしょうか。東京電力自体は何もわからないチンチン電車のお猿さんのようなものだと言われていました。七二年にスクラムが五回、ピンホールが一九本ありました。七四年になりますと応力腐食割れが出てきています。原発が実質的に動き出して四年目です。そして設備利用率も一〇年で四〇%くらい。満足に動いてなかつた。まさに実験炉をつかまされたのです。それがアメリカは狙いだったのでしょうか。しかし、そういう問題はあまり公にならないし、新聞にも載らない。七四年になると松葉からコバルトが出ましたし、貝からも出ました。すごい放射能だった。

4 反対運動の盛り上がり

七二年に双葉地方原発反対同盟を作った意味は大きかつた。七四年・七五年の労働運動の盛り上がりと連動して運動が拡がって行きます。一番大きな取組みは、七三年に福島市で開催された第二原発建設の公聴会に対する阻止闘争です。本当は、福島県双葉郡でやりたかつたということでしたが、私たちが力を持っていましたので、混乱を恐れて福島市で開催となりました。変電所へのトランス搬入阻止闘争もやりました。棚塩原発反対同盟(現在の南相馬市小高地区と浪江町棚塩地区に計画された東北電力浪江・小高原に反対する住民組織)の外倉隆さんたちは、三つの規約「一、原発に土地は売らない。二、県、町、電力と話し合わない、三、他党と

共闘しない」をつくって闘っていました。「他党と共闘しない」を掲げていましたが、私たちの勉強会に出てきたり、私たちが棚塩に行ったりして、緩やかにつながって行きました。

原発が動き始めた頃は、岩本忠夫さん(双葉地方原発反対同盟委員長)は双葉地方選出の県議会議員として取組みを進めていました。七四年に県議会で労働者被曝問題を取り上げています。しかし、国と電力も必死でね。運転を軌道に乗せようと必死だった。ただ、原発問題での東京電力との交渉は勝負にならないです。こちらは現場に入れないでしょう。相手方の情報がすべてです。新聞報道は少ない。交渉にならないのです。しかし、時の経過とともに労働者の証言が取れるようになります。そうすると、だんだん喧嘩になってくるのです。大きな事故の時には国会議員が来て、交渉をやりました。

5 原発マネーと町の変貌、原発反対運動

原発一〇基と火力五基、トータル三兆円ものプラント建設です。私の試算では、電源三法交付金が四〇年間で四〇〇〇億円です。これらの原発マネーが七万六〇〇〇人の地域に流れ込みます。町は急激に変貌を遂げる訳です。今まで貧しかった地域に飲み屋さんがばんばんできる。ガソリンスタンドの社長は原発長者のトップですね。旅館業、運送業、弁当屋さん。原発長者を輩出し、誰もが現金収入を得られるようになって、町全体が活況を呈します。飲み屋の且

那に一番景気が良かったのはいつ頃かと聞くと、富岡は八〇年頃だったと言っていました。こんなに儲けて良いのかと怖くなったと言います。後もどりはできない。麻薬で地域全体が気持ち悪い状態でした。

それに対して、原発反対のデモをやっても、勉強会を開催してもなかなか人が集まらなくなる。原発反対運動は荷物を積んで、坂道をブレイキのきいた自転車で漕いで上っていく感じでした。重かった。この四〇年間ずっとそうだった。

原発集中地帯で原発が安全だと思っている人はきわめて少ないです。ほとんどの人は、原発は危険だと思っている。ただそれが日常だと、毎日排気塔を見てると当たり前風景になります。勉強していないと、原子炉の中に一年間で広島型原発一〇〇〇発分の放射能を内包しているのだ、ということにはわからない。原発の恩恵だけは前面に出てくる。

私は少数人数でも運動ができるように街宣車を買って、「これ以上原発はいらない」と一〇年前から宣伝して回っていますが、石をぶつけられたとか、やめるこのバカとかと言われたことは一度もないです。住民のなかに、石丸のような人間もいなければいけないという考え方や、俺はできないけれどお前はがんばってくれという声もあります。

他方、地域の推進派にとって、原発に反対する人たちもいないと困る。原発反対派がいな

と東京電力や国は出すものも出さなくなるので、反対派が力をつければ、自分たちに良いところがあると分析をする人もいる。だからしたたかですよ。

6 岩本忠夫さんの転身

七九年三月のスリーマイル島原発事故と直後の県議会選挙が一番衝撃的でした。岩本忠夫さんにとっては三回目の県議員への挑戦だったのです。マスコミは岩本の選挙に神風が吹いたと報道しました。それくらい衝撃的だった。ところが、地域にピラマキをしても、糠に釘を打つような感じでした。日本の国民性なのか、原発集中地帯の特徴なのか、原子力政策は選挙の争点になったためしがない。これは原発立地を通産省(当時)や原子力安全委員会が一元的に管理していて、国会の承認がなくても原発立地を進められるという特異性にもあるのでしょうか。ほとんど、選挙の争点にならない。そして、原発のマネーを享受することによって、もう引き返せないという思いが住民のなかにどんどん浸透している。禄を飯でいるから、逆らう訳にいかないという意識です。

岩本さん自身は、あの選挙を通じて、原発反対運動をすることは政治的な思いを達成することではできないと思ったのではないのでしょうか。七九年の選挙以降、原発反対運動からも社会党の運動からも遠ざかっていきました。

それ以前に、棚塩原発反対同盟の舩倉委員長

は反対運動をやっている人たちに予定地内の所有地の共有地主になるよう呼びかけ、岩本さんもなりました。ところが後にそれを返上したのです。これが決定的でした。

岩本さんの娘さんが東京電力の社員と結婚したので、推進派に転じたと言う人がいるけれど、そんなちやちな男ではないですね。それは関係ないと思います。七九年のスリーマイル島原発事故の翌月の選挙でピラマキをしたが、まったく争点にならなかった。それを見て、政治的動のある人ですから、政治的思いを遂げられないなど悟って身を引いたということだと思います。

双葉町長になって二期目に、第一原発の増設を選択し、国と事業者に徹底的に利用されました。社会党の地区委員長や反対同盟の委員長をやった人が原発増設を主張する訳です。これはもう千両役者です。佐藤栄佐久知事(当時)の発言をひっくり返す役割も担いました。だから国と電力にとって相当使い勝手があつたはずです。

しかし、七月一五日に八二歳で亡くなりました。どんな思いで逝かれたのか。今回の事故前までは何とか彼の面目が立ったはずですが。家内が去年の八月二九日に亡くなって、その時にもお悔やみに来てくれました。相当具合が悪かったようです。三月一日までは七・八号機の建設は九九%建設が決まっていたよなね。それを見てあの世に逝きたいと思っていたのではないですか。二基で一〇〇〇億円は入ります。岩

本さんは、双葉町の財政破綻の主要な責任を負っているので、逆転満塁さよならホームランを夢見ていたと思うのです。今回の事故で本当に失意のどん底だったのではないかなと思います。

7 原発労働者と被曝問題への取り組み

七一年の運転開始から原発内部は予想を超えるすさまじい放射能汚染がありました。私たちも、東京電力や国もわからなかった。労働者もわからない。原発は科学の粋を集めたという。ところが中に入ってみると、自動車のエンジンルームに入ったアリのようなものだというのが労働者の実感です。中に入ってみると自分の労働の意味がわからない。「ビル代行」(今の「原子力代行」)が農業をやっている人や出稼ぎをやっていた人を原発労働者として駆り出していく。隣近所の気の利いた親父が人夫出しをやる。朝、道すがら労働者をワゴン車に乗せて、何台も原発に入っていく訳です。この人たちはほとんど技術も何もなく、単なる放射能汚染の掃除夫です。這いつくばって除染作業をする。高圧の水で洗浄する。グラインダーでさびを取る。これが三大労務です。教育が十分でないでしょう。アラームメーターとフィルムバッジ、ポケット線量計を持って原発の中に入りま

ちは律儀だからノルマを達成しようとする。作業が終わると真つ黒な痰が出てくる。まず肺が、骨髄関係の病気、血液の病気、訳のわからない病気が急激に増加しました。それで原発は危ないというニュースが拡がった。

私たちは七〇年代末に、阪南中央病院の村田三郎先生の協力を得て、福島原発被曝労働者の実態調査をやります。私たちは名簿も何もないので、芋ずる式にやるしかありませんでした。知っている人を紹介してもらい、全国各地を歩き、三〇〇人に接触をしました。アンケートに答えてくれた人が一〇〇人です。調査結果を報告書にまとめました(双葉地方原発反対同盟『資料 福島原発 被曝労働者の実態』一九八二年七月三一日発行)。

その後から被曝労働者の労災認定に関わってきました。私の調査が正しければ、今までの原発関係の労災申請は、全国で一九件、そのうち一件が福島県です。福島県が全体の六割近くを占めます。ほとんどが第一原発です。それだけ汚染されています。私が関わった労災申請のうち、四件は労災認定を勝ち取っています。認定された人たちは氷山の一角です。総評の『いのち』に事例報告を書いています。

私は、全通(全通信労働組合)で郵便局員のバイクの振動障害や頸肩腕症候群について取り組んでいました。公務外と判定が出た事案については、再審査請求をしました。そのうち人事院でひっくり返して、認定させたのが七件くら

いあります。その延長線上で、被曝労働者の労災認定を取り組んできました。特別なことという感覚はありませんでした。

8 地元の反原発歌人

佐藤祐禎さん(福島県歌人会前会長)という大熊町の第一原発から三〜四キロくらいのところに自宅のあった方がいます。この人は『青白き光』(短歌新聞社)という短歌集を出しています。書名はJCO臨界事故の青白き光です。この短歌集の四分の一が原発関係の歌です。佐藤さんの近くに被曝して亡くなっている人がいますので、この人の短歌はすごいですよ。地元で原発を歌に詠むものだから目の上のたんこぶだった。東電は原発内の短歌会の講師として来てくれと何回も佐藤さんを呼びますが、頑として行かなかった人です。

原発に漁業権を売りし漁夫の家の壁は光りて塀高く建つ
空走る原発六基の送電線逃れぬ思ひに慣れてわが住む
「この海の魚ではない」との表示あり原発の町のスーパー
すごい生活感があるのです。本当に尊敬してきました。

反原発の歌詠むわれに原発は社内の歌会の講師頼み来
なかなかおもしろいですよ。こういうの詠まれたのでは、東電もいやだっただろうと思います。

原発に勤める人にまた逝きぬ病名今度も不明なるまま
下血を下痢と信じて死にけり原発病患者輸血受け付けず

ものすごいアリテイがありますね。

9 そして、三・一一まで

印象に残っていることは、一九八九九年の第二
原発の再循環ポンプの破損事故です。東京電力
は一週間、アラームが鳴動しているにもかかわらず、
運転を続けてきた訳です。そして、当時の
補修課長が上野で自殺しています。第一原発
一号機が稼働したときから四〇%の稼働率でし
た。実験炉をつかまされて、満身に動かないと
いう結果に、あせりにあせって、原発を止めた
がらない体質があります。これは一貫していま
す。二〇〇二年のひび割れ隠しは、ひび割れを
隠して、原発を動かした続けたいという願望に負
けた訳ですよ。

九六年の電力自由化以降の原発の安上がり、
合理化政策はひどかったですよ。労働者の悲鳴
が上がる。そして定期検査の短縮や維持基準の
導入でしょう。多少のひびがあっても運転でき
る。一三カ月に一度やっていた定期検査の間隔
を二四カ月まで延ばして、ノンストップ運転で
きる間隔を延ばす。きわめつけは六〇年まで運
転できる法改正。四〇年間使ってきた原発の
「実験炉」に、社会常識から外れることをやっ
て、今日の事故を迎えたということです。想定
外ではなくて、起こるべくして起こった事故で

す。規制当局である原子力安全保安院が誘導し
て起きた事故です。この責任は重いですよ。国
家的犯罪です。

アメリカでは、三〇年間にマグニチュード五
以上の地震は三二二回だそう。日本は三九
五四回です。アメリカから一号機、二号機はそ
のまま輸入して、その後ほとんどコピーです
よね。タービン建屋の地下に非常用ディーゼル
発電機がセットされて、津波に襲われた。五
四基が日本列島、大地震列島にある訳でしょう。
これは異常というしかない。何故これ程のこと
を許したのか、いつも自問自答します。

これ程たくさん原発が建設されたのは、国
のキャッチコピーのうまさだと思っております。
「資源小国」を繰り返して、繰り返してアピールし
ますよね。「原発は絶対安全」という。それが
オーバーラップすると何でも許してしまう訳で
す。あなた方のところに四〇年ぐらいたった自
動車がありますか。家電はどうですか。農機具
は。あるはずがないでしょう。ところが原発
だけは許されてきた。原発は科学技術の世界で
はなくて、水戸黄門の印籠の世界だ。「資源
小国と絶対安全」の印籠を出されると、その段
階で日本の国民の多くは思考停止になって、な
んでも許してきた。今回の玄海原発再稼働説明
会での九州電力のやらせは、古くて新しい問題
です。昔から事故が起きると国は現地説明会を
やりました。九九%は東京電力の社員と下請の
社員で埋まって、そこにプラスチックの担当者、

トップ、商工会、民間の原発推進団体が入れ
ば、それでぎつしりです。私たちがばらばら
いて、なんぼしゃべったって、犬の遠吠えでしょ
う。必ず最後に、「私は原子力発電所が安全だ
と信じます」というのが必ず出てくる。これ
でお開きです。あの問題は私に言わせると本
当に古くて新しい問題です。

東大出の若手グループがキャッチコピーづく
りを担当していました。富岡町に、おもしろい
職員がいて、そういう人たちが町に来ると、反
対派の石丸という男の声を聞かないで帰るのは
損だからと必ず連れてきたのですよ。私はま
たくうれしくなかったですね。不思議な顔をし
て来るのです。喜んで来る訳ではありません。
「私たちの制作した宣伝やパンフレットを読ん
でくれていますか。どれくらいの人たちが読ん
でくれていますか。キャッチコピーをどうい
うふうに受け止められますか。」と興味深く聞
くのです。私は「あんなの誰もまじめに読んで
いる奴はいないよ」と言いました。そうすると若
いだけにつくりして、帰って行く。宣伝費に
ものすごくお金をかけていたと思います。

10 これまで運動を続けられた理由

私が運動を継続できたのは原発労働者に接し
てきたからです。原発の問題点を勉強する必要
があります。勉強だけでなく、原発労働者と
接触を続けるなかで、原発の内部がいかにた
らめで、東京電力は原発を運転する資格はない

ということがわかってきました。私は、東京電力を「火事場泥棒」「焼け太り」と批判してきました。自らのミスや不祥事を起こすと、そのどさくさに紛れて、自らに有利な制度改正を行なってきたからです。さらに、原発被曝労働問題を追及してきましたから、怒りが根底にありました。

私は、原発ほど不条理で、理不尽で、世代間不公平があつて、差別的なものとは他にないと思ってきました。それは何故かといったら、放射能の存在です。その放射能が原発の直面する困難のすべてなのです。今回の過酷事故、シビアアクシデントになりますと、それが数十倍、数百倍にふくらんで住民に襲いかかつて来ます。これが今の実感です。根底にある怒りと、原発はどういうものかという勉強を車の両輪にしてきたことが今まで続けられてきた理由だと思います。

三 そして、これから

避難して以降、四月に一回だけ一時帰宅しました。資料やパソコンを取りに行ってきました。二、三日前に兵庫県に避難している友人から電話がありました。一時帰宅して、私の自宅の近所の国道を走ったときに、バスの中で、毎時一九マイクロシーベルトあつたそうです。それを一年間に直すと、一六六ミリシーベルトです。帰れる放射線量ではありません。

いまは秋田に避難しています。のどかなところで、放射線の影響がゼロではないですけど、平和なところにいます。しかし、そこに留まる訳にはいきません。妻の新盆が終わったら、九月にいわき市に拠点を置くつもりです。いわきは原発被曝労働の基地になっています。この問題を全国の人たちと一緒に闘っていかなくてはならないと考えています。被曝線量が二五〇ミリシーベルトなんて、殺人的です。国家による殺人です。未必の故意ですよ。それを現場から闘っていきたいと思います。

同時に、福島の子供たちのことで胸をかきむしられるような気がします。子供たちの被曝線量をどのように下げていくかが最大の関心事です。それをやらなければなりません。

福島県はだんだん縮まっています。私自身も高齢で疲れていますから、自分が老齢化していくことを同時並行で実感していくような感じは、福島県も、観光も、産業のすべてがそうです。日本の国民は、沖繩を六〇年間放置してきましたから、福島も放置されかねないと思っています。福島からいかに発信していくか、この怒りや悔しさ、未来への思いをいかに発信していくのか、命ある限りがんばっていきたいと思います。

闘うユニオン

定価1,575円(税込) 四六判206頁

高井 晃

東京ユニオン執行委員

関口達矢

東京ユニオン副執行委員長

誰だつて
人間らしく
働きたい！

《目次》

プロローグ 労働者らしく闘う

第1章 闘争は何のため、誰のため

第2章 倒産争議—職場占拠の労働運動

第3章 卒業宣言—自立した運動組織をつくる

第4章 労働運動の原点がここにある！

第5章 規制緩和と真つ向勝負

第6章 法改悪と闘う

第7章 格差貧困—吹き荒れる派遣切りの嵐

エピローグ 闘いがなければ運動は拡がらない

旬報社

〒112-0015 東京都文京区目白台2-14-13
Tel:03-3943-9911 FAX:03-3943-8396

<http://www.junposha.com>

57

労働法律旬報

一橋大学フェアレイバー研究教育センター